

近代一宮における工業形態の変容と都市形成

岐阜大学 学生会員 ○牧野広誉
 岐阜大学 正会員 出村嘉史

1. はじめに

一宮の市街地の起源は、江戸期に真清田神社の門前で開かれた三八市と呼ばれた定期市であった。明治時代に入ると、日本各地で鉄道敷設が行われるが、特に尾張地方は100を超える鉄道敷設計画が提出されるほど鉄道敷設運動が盛んであった¹⁾。その中で一宮周辺に着目すると、1889(明治22)年に全線開通した官設鉄道をはじめ、複数の私設鉄道が多岐に敷設されている(図-1²⁾)。また、尾西地方では、明治から大正期にかけて毛織物の工業が確立し、織物生産が急激に増加した。このような流れの中、一宮では鉄道駅を中心に市街地が拡大し、1921(大正10)年に市制施行され、1925(大正14)年には都市計画法が適用されている。人口は1910(明治43)年から1924(大正13)年の14年間で70%の増加をしている。

本研究では、近代に整備された一宮周辺の流通基盤、尾西地方の工業における資本の流れ、それらをけん引した立場の思惑に焦点を置きつつ、一宮が都市として急拡大した要因を工業形態の変容という面から明らかにすることを目的とする。物理的な市街地形成の状態を把握することの他、都市成長の要因を説明するための諸項目は、現在のところ以下のようなものがあると考えられる。

2. 尾西鉄道について

1895(明治28)年、草津-四日市-弥富-名古屋において開通した関西鉄道の支線として弥富-津島に鉄道を敷設するべく、翌年に神戸分左衛門、青樹英二ほか12名の地元有志によって尾西鉄道株式会社(以下尾鉄と略す)が設立された。そして、1898(明治31)年に弥富-津島、1900(明治33)年に津島-新一宮が開通した³⁾。

鉄は本社を津島においており⁴⁾、発起人と創業時の役員構成は一宮出身の人物は少なく、津島出身の者が最も多い(表-1⁵⁾)。津島紡績の役員を兼ねている

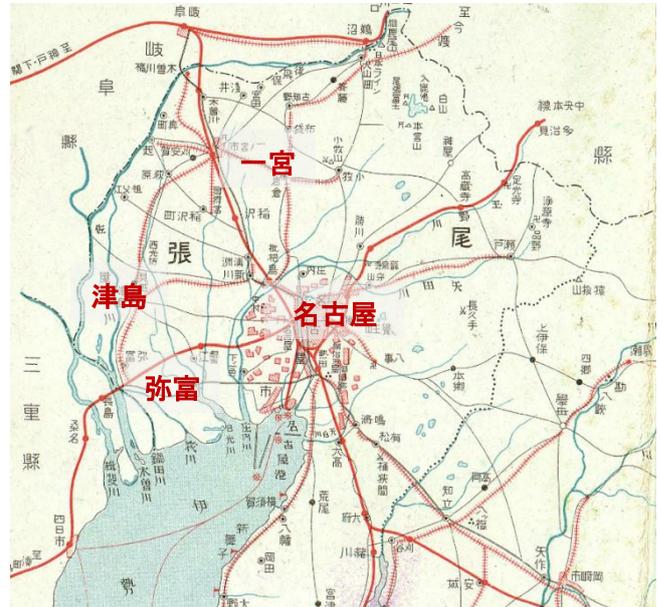


図-1 尾西地方における昭和2年時の鉄道網

表-1 尾西鉄道の発起人一覧

氏名	住所地	創立時	備考
青樹英二	海西郡東条村	社長	津島紡績社長
神戸分左衛門	海西郡宝地村		
木村馨太郎	三重県員弁郡稲部村	監査役	関西鉄道取締役
水野長一	海東郡津島町	取締役	津島紡績取締役
渡辺新兵衛	海東郡津島町	取締役	津島織布監査役
岡本清三	海東郡津島町	監査役	名古屋電気鉄道取締役
友松元太郎	海東郡津島町		津島紡績取締役
山内民三郎	中島郡祖父江町	取締役	
平林儀左衛門	中島郡一宮町		
土川弥七郎	中島郡一宮町		
宮田慎一郎	葉栗郡佐千原村		一宮瓦斯取締役 一宮電気取締役
天野佐兵衛	西春日井郡新川町	監査役	津島紡績取締役
西川宇吉郎	名古屋市内鍛冶町	取締役	豊川鉄道・名古屋電気鉄道監査役
山田市三郎	中島郡稲沢町		

人物も多かった。尾鉄の社長である青樹英二は、津島紡績社長でもあり、原料糸を他地域に依存していた津島の産業を打破しようと考えていた。そして津島で原料綿糸を自給すべく、紡績会社設立を決意したとされる。また、青樹英二は津島紡績や尾鉄以外の事業にも着手しており、津島周辺の新興意識が高かったとされている⁶⁾。尾鉄は、津島活性化を目的

として、青樹英二が津島の有力者を集め組織したことが仮説として予測される。

3. 織物業形態の変遷

尾西地方の織物業において、明治前期は織元が賃織農家と呼ばれる副業的に織物業を営む農家を組織する問屋制的支配が成立していた。しかし、明治中期以降にその中からマニファクチュアと呼ばれる工場制手工業による経営形態が確立されると、織元を中心とした問屋制と並んでマニファクチュア経営が急速に発展し、これら二つの経営形態が尾西地方に広汎に展開されるようになる⁷⁾。

その後、1912 (明治 45) 年に設立された一宮電気株式会社による電動力の普及、毛織物の発達が見られるようになると、第一次世界大戦の頃から尾西地方でも力織機が急速に普及し、問屋制・マニファクチュア経営から力織機を用いた中小規模の機械制工場へ発展した。

4. 一宮電気株式会社について

1912 (明治 45) 年に一宮電気株式会社が設立された。発足当初の役員には、土川弥七郎 (一宮銀行頭取・石油商)・佐分慎一郎 (一宮銀行取締役)・豊島半七 (綿糸商)・豊島正七 (綿糸商) らの地元一宮町出身者が名を連ねている⁸⁾。

1916 (大正 5) 年には愛知電気工業株式会社を合併しているが、合併の頃から織物業への電動力の導入が急激に増加し、電力需要が伸長した一方で供給力不足を招く。さらに 1919 (大正 8) 年に電力料金の値上げに絡み需要家との間で対立を起し、一宮町との間でも報償契約の改訂をめぐって紛争が生じる⁹⁾。こうした中の 1920 (大正 9) 年、一宮電気は名古屋電灯株式会社に合併される¹⁰⁾。

5. 外部資本の参入

毛織物が発展するにつれて、1907 (明治 40) 年に一宮紡績を合併しできた大日本紡績一宮工場¹¹⁾をはじめとして、1929 (昭和 4) 年の東洋紡績一宮工場¹²⁾、1932 (昭和 7) 年の昭和毛糸紡績工場¹³⁾など外部資本による大規模工場の立地が目立つようになる。(図-2¹⁴⁾)

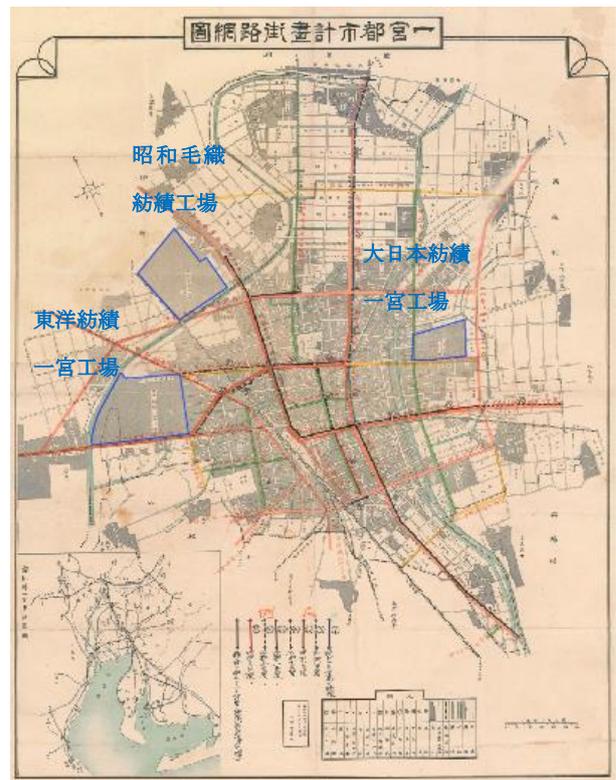


図-2 昭和初期の一宮の工場立地

6. まとめ

一宮が市制施行され、都市計画法が適用されるまでの市街地発展においては、以上のような与条件が確認された。すなわち、鉄道敷設や電動力の普及などのインフラ整備の向上、それに伴う織物業形態の変遷が考えられる。これら与条件にはそれぞれどのような背景と関係する立場の思惑があったのだろうか。一宮の都市形成の要因はこれらを整理し、互いがどのような因果関係にあったかを整理することで明らかにされるであろう。

- 1) 井戸田弘:東海地方の鉄道敷設史 III, 2008
- 2) 吉田初三郎:愛知縣鳥瞰圖, 吉田初三郎出版部, 1927 に附属する「愛知縣交通畧圖」の一部を筆者により編集。
- 3) 清水武, 神田年浩:保存版 尾西線の 100 年, 1999.3.16
- 4) 第五課商工係:鉄道会社書類, 1898 収録の「私設尾西鐵道株式會社起業目論見書」より。
- 5) 清水武, 神田年浩:保存版 尾西線の 100 年, 1999
- 6) 橋口勝利:近代津島地域における企業勃興と資産家活動 - 資産家グループ形成と津島紡績株式会社の事業展開 -, 政策創造研究 第 2 号, 2009.3
- 7) 森鉦太郎:新編一宮市史 本文編下, 1977.9.1
- 8) 業興信所:日本全国諸会社役員録 第 21 卷下編, 1913
- 9) 森鉦太郎:新編一宮市史 本文編下, 1977.9.1
- 10) 東邦電力史編纂委員会:東邦電力史, 1961
- 11) 大日本紡績:大日本紡績株式会社五十年記要, 1941
- 12) 東洋紡績株式会社東洋紡績七十年史編修委員会:東洋紡績七十年史, 1953
- 13) 森鉦太郎:新編一宮市史 本文編下, 1977.9.1
- 14) 一宮市役所:一宮都市計畫街路網圖, 1931.6.20 の一部を筆者により編集。